

提出日：令和 3 年 2 月 24 日
 所 属： 獣医 学部 獣医 学科
 氏 名： 藤田 幸弘 職位： 准教授
 役 職： 臨床獣医学系主任

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）				
科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医外科学	獣医学科	必	4	140
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必	5	140
総合獣医学	獣医学科	必	6	140
小動物病院実習	獣医学科	選	6	のべ 3
先端獣医療	獣医学科	選	6	40
獣医外科学実習	獣医学科	必	5	140
卒業論文	獣医学科	必	6	3 から 4
小動物臨床実習	獣医学科	必	5	140
獣医学概論	獣医学科	必	1	140
獣医外科学特論	研究科獣医学専攻	必	1	3
動物人間共生論	動物応用科学科	必	1	120
獣医学特論 I	獣医学科	必	5	5
獣医学特論 II	獣医学科	必	6	5

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）
<p>講義科目では、教員からの一方的な講義を学生に聴講させる形式ではなく、学生自身が考え、理解することを目指している。そのための工夫として、配付資料内に学生が記入できるような括弧を複数箇所設けており、自ら考え、実際に書くことで知識として定着することを期待している。実習科目では、実習の目的を理解した上で実習に臨むように指示し、理解度を確認するために、質問を募り、質問がない、という場合には教員から基本的な内容、よくある質問を中心に質問し、学生と教員でディスカッションを行うようにしている。臨床科目となるので、インプットするのみではなく、常にアウトプットする訓練を行うことを意識して、教育を行っている。</p>

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）

アクティブラーニングについての取組

学生が自ら考えることを促すために、配付資料内に括弧埋めをさせるようにしている。教員から質問する内容は、基礎的な内容から始め、教員から早々に正答を明かさずに、学生自身の言葉で回答するように促している。

ICTの教育への活用

実習科目においては、学生が行う実習内容の動画（デモンストレーションなど）を配信している。さらに、実習内で学生が行う症例発表および検討については、発表に使用するプレゼンテーションファイルを作成するための情報（静止画および動画ファイル）を配信し、学生自身がプレゼンテーションソフトによって作成する。そのファイルを使用して、受講学生および教員に対し症例発表を行った後、検討（ディスカッション）を全員で行っている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ① 教育（授業，実習）の創意工夫（B）
- ② 学生の理解度の把握（B）
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（B）
- ④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A）
- ⑤ 双方向授業への工夫（A）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

講義科目では、学生の理解度を把握するために、担当講義の開始時または時限の間に小テストを行う、ことを行う予定である。実習科目では、実習前に理解しておくべき内容を配付資料、動画ファイルなどを學理にアップロードする。学生とのコミュニケーションについては、学生からアウトプットを促すような講義・実習（前述）のように継続する。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

入手可能な過去の国家試験問題を使用し、解答を導きつつ、関連する内容を詳細に解説した。国家試験に頻出の疾患を中心に解説を行ったが、講義終了後に、学生各自が解いている過去の国家試験問題について、学生から多く質問を受けるようになったことから、国家試験の問題に

<p>対する考え方について理解が深まった、という印象である。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u> 要望があった場合には、次回の授業・実習に反映させるように努力した。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u> 対応して以降、とくに追加の対応は必要なかった。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。</u> 次年度以降も、何か要望があれば、可能な限り早急に対応する。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u> インプットするだけでなく、インプットした情報・知識を自分の言葉でアウトプットできるように、学生には基礎的（簡単な）な質問から開始するようにしている。たとえ、質問に対する回答が間違っていたとしても、否定することはせず、何かしらの理由をつけ、少しでも肯定するようにし、正答に近づくようにヒントを与えながら、学生の積極性を潰さない（消極的にならない）ようにしている。</p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価 講義を聴講後、関連実習を行い、さらに実際の診療活動を見学した際に、点と点がつながって腑に落ちた、という感想を学生から得た。教員側から促さなくても、自ら質問するようになり、麻布大学の学生は質問ができて素晴らしい、というコメントを外部の獣医師より頂いた。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）</p> <p>大学教育に関わるFDについては、可能な限り参加したつもりであり、今後についても、附属動物病院での診療活動などがない限り、参加したい。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>短期目標：質問を自ら考え、質問できる学生を増やすこと。投げかけられた質問に対して、自分の言葉で考え、回答できる学生を増やすこと。</p> <p>長期目標：学生間、または学生と教員で濃密なディスカッションがスムーズに行えること。</p>
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p>